

東京天台

平成二十六年
秋彼岸号

発行所
天台宗東京教区

杜多徳雄

〒107-0062 東京都港区南青山1-3-22
TEL.03-5785-3481

<http://www.tendaitokyo.jp/>

身近なほとけさま 「お不動さま」

「心を発す」ということ

天台宗では、お坊さんが初歩の修行をするとき、例外なく「お不動さま」を本尊としてお祀り致します。そもそも修行の出発点とは、お釈迦さまのような最高の人格者を目指し、自己の心を磨いてゆこうと決意することにあります。しかしこのことは、お坊さんだけに限らず、誰でも共通の念とされなければなりません。そのような心を発す全ての

者を「お不動さま」は守護して下さるのです。

この心境を登山に譬えるならば、非常に険しい高山の頂上を目指し、登山口から初めの一步を踏み出すとき、とてもいえまじょうか。

しかし、山の頂へ向かう道程は困難の連続でもあります。楽な誘いに惑わされて途中であきらめてしまったり、下から登ってくる者を見下すような慢心が起こるのも、悲しいかな、人間の心のありのままの姿です。これらを常に警戒し、登山口での、清廉なる心を絶えず呼び戻してゆくこと、その連続こそが実は「真の仏道」そのものなのであり、特に天台宗はこのことに重きをおきます。



不動明王像(延暦寺藏)

す。また、お不動さまが左手に持っているのは、人を縛り引き寄せる法具ですが、むしろ誰をも惹きつけるような理想的人格を養ってほしい、という願いを形にしたものともいえるのです。

「お不動さま」の姿を通じ

お不動さまは、盤石の上にしつかりと足を付け、火焰を背負い、憤怒の表情で、右の手に「剣」を持っています。このお姿こそ、山の頂上を目指すなかで起きてくる様々な魔と戦うことのできる「私たち自身の強さ」を形にし、励まし続けて下さっているのです。

天台宗のお坊さんが持っている数珠は、一つ一つの珠が丸形ではなく、そろばんの珠のように尖っています。これは、お不動さまの剣を模ったものともいわれます。お坊さんが「数珠を擦る」という行為は直ちに「心の魔を伏す」というお不動さまの徳を表す行為でもあるのです。法事などで数珠の音を聴くとき、お不動さまの姿を我が心として頂ければ幸いです。

「現代社会と仏教」

「いただきます」

給食で「いただきます」と手を合わせることを宗教行為だといったり、給食費を払っているのだから「いただきます」を言わせることはおかしい、という親がいるといった話を耳にしたことがあります。お金さえ払えば食べたいものが手に入る「飽食の時代」は、このような人たちに「食」への感謝の気持ちを忘れさせてしまったようです。

仏教において、食事は古来より大切な修行の一つとされます。僧侶が食事をする場所も「食堂」といって、修行道場として重要な位置を占め、食事作法に則り食事が進められます。また多くの宗派には、檀信徒向けに食事作法を簡略化したものとして食前・食後の言葉があり、天台宗では次のような文をお唱えします。



食前観

吾今幸いに、仏祖の加護と衆生の恩恵によつてこの清き食を受く、つつしんで食の来由をたずねて味の濃淡を問わず、その功德を念じて品の多少をえらばじ。「いただきます」

食後観

吾今此の清き食を終わりにて、心ゆたかに力身に充つ、願わくは此の身心を捧げて己が業にいそしみ、誓つて四思に報い奉らん。「ごちそうさまでした」

すなわち、生産・流通・販売・調理などに関わる様々な人々のおかげで食事をいただけることに感謝し、動植物の生命を肉や野菜として食べる(いただく)ことによつて生かされていることを自覚し、いただいた生命を無駄にしないためにも、今自分がやるべきことを一生懸命に行わなくてはならない、といった意味のこめられた言葉が「いただきます」と「ごちそうさま」なのです。

日本が「飽食の時代」といわれて久しい今この瞬間にも、食べ物に困っている人は世界中に大勢います。改めて「食」への感謝の気持ちを持ち、心豊かな日々の生活を送っていききたいものです。

仏教豆知識

⑦

『お寺の鐘』

♪夕焼け小焼けで日が暮れて、山のお寺の鐘がなる…♪(童謡『夕焼け小焼け』)とあるように、昔から寺院の鐘は時を知らせ続けています。

江戸時代には幕府公認の「時の鐘」があり、江戸市中の十カ所ほどで撞かれ、その音はほぼ江戸全域に聴こえていたようです。芭蕉の有名な句に、

「花の雲 鐘は上野か

浅草か」とありますが、今でも寛永寺や浅草寺などでは「時の鐘」が撞かれています。

このような寺院の鐘を「梵鐘」といいます。仏の世界が清浄であるさまを「梵」といので、梵鐘は単に時報としての役割だけに止まらず、その音を聴くと一切の苦悩が除かれ、

甚深な功德があるものとされています。

年越しの風物詩といえ、除夜の鐘が真つ先に挙げられます。その回数は、一切の煩悩の数とされる百八回が一般的です。百八という数の由来には、四苦八苦説(四×九+八×九=百八)を含め諸説ありますが、いずれにせよ常に私たちには煩悩が付きまっています。

騒がしい日々でありながらも、心に響き渡る除夜の鐘の音に耳を澄ませ、煩悩を少しでも洗い流して、希望に満ちた新年を心穏やかに迎えたいものです。



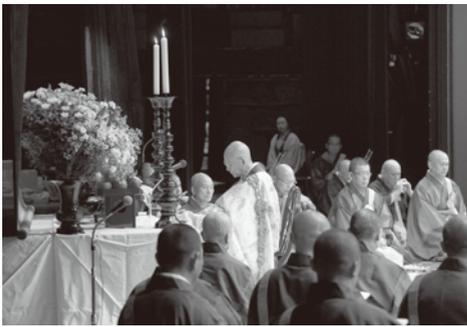
一隅大会報告

六月十一日、浅草公会堂において「第四十四回 一隅を照らす運動東京大会」が約千人の檀信徒を集めて開催された。悪天候の中、参加者に特別公開された浅草寺伝法院庭園にも多くの方が足を運んだ。

第一部では、舞台上に掲げられた慈覚大師の御影を「供養する法要『慈覚大師御影供』が、雅楽の調べの中で厳修された。その後、輪王寺門

跡寛永寺住職・神田秀順大僧正を導師にお迎えし、檀信徒とともにお勤めを行った。

第二部では、東京工業大学リベラルアーツセンターの上田紀之教授より『よき種をまく仏教』と題したご講演をいただいた。「人間までもが使い捨てられるようになった現代の日本は『心の敗戦』の時代を迎えている」と語る先生。「現代の人々には心の支えが必要であり、仏教やお寺こそがその支えになりうる」と述べて、従来の発想にとらわれず人々の苦しみに向き合う寺院の事例を映像で紹介された。後半では「縁」についてのお話。「よい縁があることを信じてよき種をまけば、いつかきつとよいことがおきる」というダライ・ラマ法王のお話を引いて、「よき種をまくこ



厳肅な法要の様子



講師の上田紀行氏

とを喜ぶことは、『一隅を照らす』ことにつながる。よき種をまくことを心の支えと

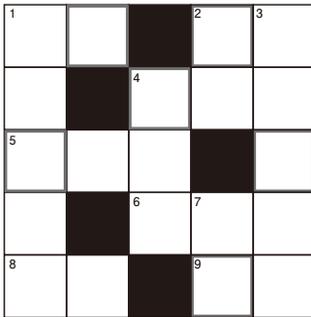
することを使い捨てられるという感覚がなくなれば、人々が幸せに暮らせるようになるのではないかと、現代を生きる私たちへの提言で講演を締めくくられた。

来迎院 中村 勝保様
大圓寺 島崎 弘行様
眞覺寺 板橋 一男様
大善院 内田 正夫様
安養院 川田富美雄様

〈募金御礼〉
皆様からの善意の募金は、総額67万3370円になりました。これを天台宗地球救援事務局に寄託いたしました。茲に謹んでご報告と御礼を申し上げます。

徳正寺 小林 宏子様
龍眼寺 沼田 典之様
金藏寺 逸見 明美様
寛永寺 田中 秀樹様
圓乗寺 利部 雄藏様
永安寺 矢藤 利通様

てんだいクロスワード



タテのカギ、ヨコのカギにしたがいがマスに言葉を入れてください。全てのマスを埋めたら、6つの太枠マスの文字を並び替えて、ヒントをもとに言葉を作りましょう。

ヒント 今年の一隅大会の法要は〇〇〇〇〇〇御影供

タテのカギ

1. 南無〇〇〇〇〇と念仏を唱える。
2. 菅原文太さん主演映画「〇〇義なき戦い」
3. この木の下でお釈迦様は悟りを開いた。
4. 簡単でかざりけがないこと。
7. 〇〇に引かれて善光寺参り。

ヨコのカギ

1. お鍋のポイントは、〇〇をとること。
2. じっくり深いお母さんのこと。
4. 「江戸っ子だってねえ」「〇〇〇の生まれよ」
5. 〇〇〇をむさぼる(なまけてねむること)
6. 新撰組一番隊組長「沖田〇〇〇」
8. さしみの〇〇
9. 〇〇塗りのお椀で味噌汁を頂く。

[答えは4面の下部に]

天台の寺めぐり ③⑧ 新宿周辺

● Wの勝守り 寶泉寺

当寺は、早稲田大学と隣接しており、以前は、その敷地の大半が寺領であったと言われている。

弘仁元年(810)又は承平年間(931~938)創建。開基は平将門の乱を平定した藤原秀郷(俵 藤太)とも伝えられる古刹である。

江戸時代に隆盛を極め、本堂(本尊薬師如来)、毘沙門堂、常念仏堂、鐘楼を擁した。なかでも毘沙門堂は、秀郷の念持仏の毘沙門天(慈覚大師作)が勝負事に「ご利益があると有



Wの勝守り

00坪を賜り、御朱印寺領200石を拝領して現在地に移った。
寛文元年(1661)千代姫により本堂が建立されて四年後、寛永寺より信祐法印を招

38

新宿周辺

名になり、江戸で最初に「富くじ」が行われた寺として「富興行一件記」に記されている。第二次世界大戦の戦火に遭い全ての堂塔伽藍は消失し、現本堂は昭和四十一年再建される。

現在では、早稲田大学とのご縁により、学業成就、合格祈願のご利益のある寺として地域、学生から信仰を集め、なかでも「Wの勝守り」が人気を呼び多くの参拝者が訪れる。

● こぶ寺 自證院

当寺は、寛永十七年(1640)現在の牛込榎木町に尾張徳川光友室千代姫の生母、お振の方「自證院殿」を供養する為に建立された。正保四年(1647)將軍家光より16

00坪を賜り、御朱印寺領200石を拝領して現在地に移った。
寛文元年(1661)千代姫により本堂が建立されて四年後、寛永寺より信祐法印を招

● たんきり地蔵 安禅寺

当寺は慶長十三年(1608)江戸城和田倉門付近で真言僧行善によって創建



本尊阿彌陀如来像

き住持とし、寺号を「鎮護山圓融寺 自證院」とした。

その後、享保十五年(1730)近隣の出火により類焼したが、元文三年(1738)尾張徳川家戸山屋敷内の丸太節木作りの観音堂を拝領して、本堂中門等が再建された。節目の多い材木を使用した事で通称「瘤寺」と呼ばれた。

また、明治政府の社寺土地令により境内地と墓地の一部を残して寺領の大半は国有地として没収された。さらに東京大空襲によって本堂・庫裡・什宝物は灰燼に帰し、現在の本堂庫裡は昭和五十二年に再建された。

され、寛永十一年(1634)將軍家光による江戸城拡張の折、門前の通称「たんきり地蔵」と共に現在の地に移る。当初は日蓮宗であったが中興堯観の代に天台宗に改宗された。

その後、安政の大火で寺が類焼した際に地蔵像も被災、関東大震災でも損傷したため、谷中の千体地蔵を手掛けた仏師により修復された。その地蔵像は東京大空襲によって寺と共に失われてしまったが、昭和三十三年に丈六の小松



たんきり地蔵



クロスワードの答え
(じかくだいし)=天台座主三世「慈覚大師」円仁